

## 2. 大学1年生 -1957年-

### 一誠寮

東大受験のため初めて上京して、すぐ鈴木武春さんに電話した。一次試験と二次試験の間には合宿所である一誠寮を訪問し、スクラップブックを見ながら鈴木選手の活躍ぶりを拝聴した。本盗に成功した話や早大木村投手に対して1番打者(鈴木選手)の次から9番打者まで8連続三振をとられた話などが印象に残っている。本番の試験について、毎夜その日の結果を報告していた。3日目の夜、「私の予想よりすべての科目が出来ました。高知に帰って練習してきます」と言って帰郷し、土佐高校の後輩たちと毎日練習をしていた。

合格発表を聞き、その翌日には上京し、入学手続きをする前に、野球部の合宿(一誠寮)に泊めてもらい、練習に参加した。グラウンドには、すでに片桐弘之と古館康生が来ていた。彼らはいずれも親子二代東大の選手である。片桐の親父さんは、生まれたばかりの息子を東大グラウンドに連れてきて、お前はここで野球をやるのだと言った伝説の持ち主である。

寮での生活は18歳になって初めて共同生活をする私にとって不思議なことが多かった。上級生が掃除をしているのに、下級生は知らん顔であった。すべての部員に平等に当番が割り当てられ、その当番が掃除をするのである。風呂に入る順序も不同で、上級生と下級生とが一緒に入っていた。また、後輩をさん付けで呼んでいる人がいた。これは、高校で下級生であったが、大学では逆に上級生となったためと判明し、納得した。

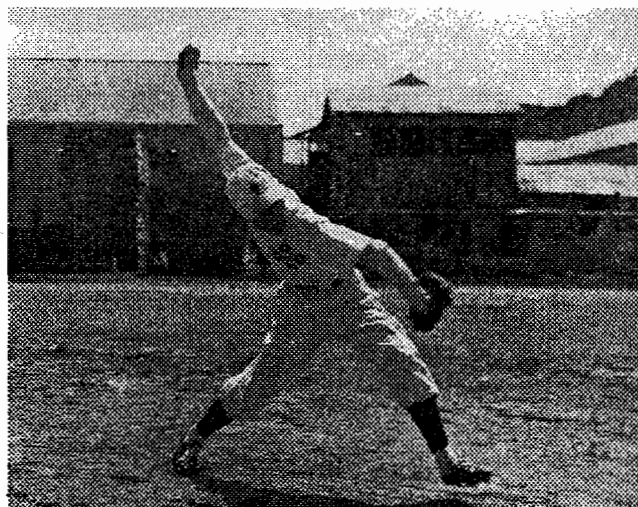
4月になったある日のこと、**原田靖男**主将(湘南高校時代に甲子園優勝の経験を持つ)に呼ばれ、東京に私を置いてくれる親戚はないかと聞かれた。私はありませんと答え、しばらく考えておられ、よしと言って入寮を正式に許可してくれた。入退寮の権限は主将が持っているのである。この時入寮できたのは、1年生で私だけであった。多くの上級生が寮に入っていないことにこの時初めて気づくほどの世間知らずであった。

やがて**高橋秀明**が入部してきた。大分工業を卒業して九州の三菱電機に就職していたが、思うところあって退職し、駿台予備校を経て、私と同時に入学してきたのである。大分では、稲尾投手や和田捕手たち(彼らのプロ野球での活躍はどなたもご存じ)と一緒に野球をやっていたつわものである。後日、「東大が生んだ最高の捕手」との折り紙を付けられた男である。彼と同級となったことは、私の運が良いところである。程なく彼と片桐とが入寮し、私を含めた3人が同室で過ごすことになる。

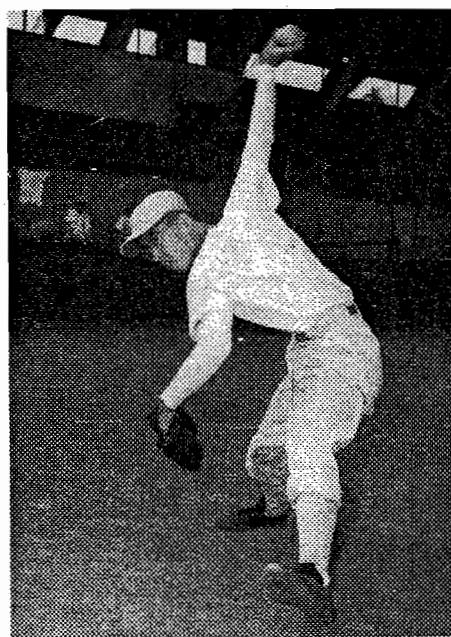
5月になってからだと思うが、竹田晃先輩に連れられて、高橋と3人で日立に行った。日立製作所に監督兼主戦投手の**蒲池信二**先輩がいたからである。竹田さんとは同期である。都市対抗で大活躍し、殊勲賞をもらった直後であった。2日間コーチを受けた。私にとって生まれて初めて受けるコーチといってもよい。腰は回すものではなく「押しだす」ものであることを自ら投げて見せてくれた。しかし、どうすればそうなるかが、私には判らなかつた。そして、当然のことながらすぐには出来ない。そのように投げようとする、バランスが崩れてしまい、全く力が入らないのである。言い訳として、蒲池さんのように体力のある人は、それがよいかもしれない。が、私のように体力のないものは、遠心力をフルに使って腰を回転させて投げるのがよいのではないかと考えたほどである。最後に、日立

製作所の選手相手にレギュラーバッティングを投げる機会を与えてくれた。私のフォームで投げ、普通の出来にも関わらず、ほとんど打たれなかった。これを見て竹田さんは素直に喜んでくれたが、私には日立の選手に遠慮があるように思えた。

蒲池さんのコーチ内容が、竹田さんを通じて4年生の日高一雄捕手に伝えられ、以後ブルペンで私の球を受けてくれることになった。新米の1年生の球を正捕手が毎日受けてくれるのである。今思い出すと涙が出るような嬉しい話である。しかし、当時は日高さんが鬼に見えた。ある日少し肩の調子が悪く、フリーバッティングを手抜きして投げていた時も、日高さんに何か言われ、私は腹を立て、肩が壊れたら日高さんのせいだと思って思い切り投げつづけた。なんと肩の痛みが取れてしまった。全力で投げることで、正しく肩が使えたらしい。日高さんに向かってインコースのストレートで良い球200球を投げるのが、私の日課となっていた。日高さんが受けてくれるだけでは、良い球は100球位しかない。日高さんは打撃練習やノックを受けに行く。そこで1年先輩の内野恭志さんに交代する。そうすると不必要な力が抜けて良い球が続き、あっという間に200球が終わるのが常であった。内野さんは私にとって「ほとけ」に見えた。秋には、蒲池さんの教えがどうやら正しいと思えるようになってきて、時には上手くできるようになった。これができると、不思議なことに、スピードが出る上にコントロールも良くなったのである。後に、あらゆるスポーツにとって、最も大事なことと確信するに至る。竹田、蒲池、日高、内野の4先輩は、私の東大での投手としての成長にとって不可欠な方達であった。



高校時代の投球



大学1年生時の投球(練習時)

2枚の写真を比較されたい。高校時代には右足が地面に着く前に投球動作に入っていたが、大学1年生時は、左足が地面に着いてもまだ投球動作に入っていない。重心は右足に残っており、“ため”ができています。その結果、球威とコントロールの改善を導いたのである。蒲池さんの指導の成果である。

## 六大学の野球

さて、いよいよリーグ戦の開幕である。ベンチに入る25人のなかに、1年生では私と片桐が入った。私は試合前のフリーバッティング投手が主な役目であった。六大学での最初の試合は、当時最強の立教大学が相手であった。主将は名手本屋敷錦吾(プロでも大活躍)。投手は杉浦忠(プロ入りすぐ最高の投手であることを万人に認めさせた)。4番打者は長島茂雄である。彼の最初のフリーバッティングをベンチから見てまず驚かされた。2箇所のゲージの内、レフトから遠い方の打席に立つ。それでも彼の打球は、当時の広い神宮球場(両翼330フィート)の柵越え率実に7割、しかも2割はバウンドして場外へ消えた。彼の体力のピーク時であり、プロに入ってから、この時の力強さとしなやかさを越えた彼を見たことはない。杉浦投手の球はホームベース近くでホップする。本屋敷選手はピンチでも何気なく球をさばく。これが六大学の野球か。東大とのあまりの差に呆然とした。この三人以外にも、この時ベンチにいた中から、投手森滝義己(2年、国鉄で完全試合)、捕手片岡宏雄(4年)、種茂雅元(3年)、三塁手杉本公平(1年)らがプロ野球で活躍している。

記録を調べると、全日本大学野球選手権大会が始まって1976年までの5年間で東京六大学以外のチームで優勝したのは、1976年の村山投手を擁する関大のみである。その後私が卒業するまでは、全て東京六大学が優勝した。1977年立教大学、78年立教大学、79年早稲田大学そして80年法政大学である。

長島選手に対しては誰もストライクゾーンに投げない。もしも、私が対戦しても、おそらくストライクを投げなかったであろう。わが軍の吉田投手は、彼に対して、ほとんどの球を真中低めでストライクゾーンからボールになる球を投げたのである。長島選手は、それを打たなければ四球になるので、思い切り振る。打球は塀際まで飛んではいくが、あらかじめ深く守っている外野手のグラブに収まる。他チームの投手もそれを見習った。もし、彼がストライクだけを打っていたら、プロ野球でも4割を何度か打てたと思う。プロ野球時代の彼の記録は、王選手や落合選手などと比べて劣っている。しかし、通算200勝をしているような投手との対戦成績だけを比べると、おそらく彼が最高ではないかと思う。そのような投手は、彼に対しても逃げずに堂々と勝負するからである。また、杉浦投手の球は誰にも打てなかった。打てるとすれば同僚の長島選手だけであろう。この年は、立教大学の春秋連覇であった。

私は、この春のシーズン、2試合に登板の機会を与えられた。対慶応1回戦と対早稲田1回戦である。対慶応戦は8回の1インニングのみ。最初の打者が高校の先輩4番の永野さん(土佐高校が夏の大会で準優勝したときの主将)であった。後輩のために凡打してくれ、0点に押さえることができた。対早稲田戦は、最後の2か3インニングを投げさせてくれた。点はとられていない。近藤昭仁(プロ野球の選手・監督として活躍)、森(プロ野球で本塁打王となる)、木次(巨人で活躍)などと対戦しているが、あまり印象には残っていない。これ以後、なぜか1年生の間は登板の機会を与えられなかった。したがって、自責点0のまま1年生は終わった。東大は、春2勝9敗ながら、明治に勝ち点を挙げて久しぶりの最下位脱出を果たした。しかし、秋は1勝10敗と最下位に甘んじた。